

真の「一致」を求めて

(ピリビ二・一〜二)

中国の「国共合作」、日本の「大政翼賛会」、イギリスはチャーチルの「挙国一致内閣」、そしてナチ党による独裁体制。共通するのは脅威に対する抵抗と勝利のための「一致」である。国家存亡の危機的な状況の中で、内側で争っているのは倒れてしまう。そこで、当面は一つ目標に向かって進もうと言うわけだが、だがこうした「一致」は一つ間違えば国家をとんでもない方向に導くのもまた事実。それは日本に然り、ドイツにおいて又然りである。

閑話休題。今朝の個所でパウロはピリピのクリスチャンたちに一致することを切実に願っている。彼らは福音を熱心に伝えている称賛すべき教会ではあったが他方では中心的な婦人達の間に重大な齟齬が生じていたのだ（参ピリピ四・二）。今朝はそのような状況に向けて書かれた使徒パウロの「処方箋」を見ていきたい。

一、一致の基盤―救いの事実

一節においてパウロは「もし、、なら

ば」を四つ並べて、その後的一致することに関して四つのことを述べているのだが、ここで注目すべきは「キリストにある励ましをもっているのは誰か」という問いである。これは文法的には不明瞭なのだが、前後関係から考えるとピリピ教会のキリスト者を指しているのは明白である。だからある英訳(NIV)では、「もしあなた方がキリストにある励ましをもっているなら」と訳している。つまりパウロがここで訴えているのは観念的なキリストの「励まし」や神の「慰め」などではなく、ピリピ教会のクリスチャンたちが実体験したキリストにある励まし、神の愛の慰め、更には聖霊の交わりである。パウロはピリピ教会全体に共通する救いの体験を思い起こさせることによって、一致を促しているのだ。確かに彼らは現時点において一致できていない。しかし彼らは救いにおいては既に一つとされているのであり、この体験こそがクリスチャンの一致の基盤なのである。

二、一致をもたらず方法―謙遜

続いてパウロは一致に至る具体的な「かぎ」を彼らに授ける。それが三節に書かれている「へりくだって、互いに人を自分よりも優れた者と思う」ということである。端的に言えば「謙遜」ということになるのだろうが、これは注意が必要な概念であ

る。というのも日本文化における「謙遜」と言うのはともすると「卑屈な自己卑下」と同列に扱われやすいからである。良く聞く「いやあ、私なんてとてもとても」「またまた、ご謙遜を」という会話の背後にはしたたかな打算が隠れていることがしばしばだ。だがここでの謙遜はそういうものではない。むしろ自己の事は後回しにして、相手を尊重し、その益を考えて行動することである。このような姿勢でいれば確かに人間関係は円滑になるだろう。反対にどんな時でも自分の意見に固執し、「私は」「私は」を繰り返していれば、そこには際限のない闘争と不信が積み重なっていくのは必定なのである。

三、一致の焦点―救い主イエス

一致への道を具体的に示したパウロは、更に五節以下において、救い主イエスの姿を描写することによりクリスチャンの一致の焦点を明示する。興味深いのは少ない学者たちがこのキリスト賛歌の起源をパウロ自身ではなく、当時すでに教会で良く用いられていた賛美にしているという点である。確かに原文で見るとこの詩は実に良く構成されており、均整が取れている。だがこの詩は同時に「破格」でもある。というのは、「死にまで従われた」の後に「十字架の死にまで」という行が追

加されているからである。ある学者はこの挿入はパウロによつて為されたものだと推察しているが、これは実に興味深い見解である。十字架はローマ人にとつては最も恥ずべき死刑の方法であった。彼らは名譽のためにむしろ斬首を選んだと言う。他方でユダヤ人にとつて木にかけられることは呪いそのものだった（参申二二・二三、二三）。それでもイエスは従われた。それほどまで自分を「無」にされたのだ。神と人、人と人との間に和解と一致を作り出すためには、イエスにとつて「自分」などはもうどうでもよかつたのである。

* * *

時折「この教会には一致が無い」「愛が無い」などと無遠慮な批判をする人がいる。確かに地上における教会は「途上の共同体」だからそういうこともあるだろう。だが批判だけでは解決にはならない。ましてや「だから私の願いは、、」などと自己を最大化するなどはもつてのほか。だがもし私たちがパウロの勧めの通り、キリストにある共通の救いの体験を想起し、イエスの謙遜を模範として、従順と謙遜に歩むなら、キリストの一致は必ず実現する。無責任な批判者になるのはもう止めだ。平和を作るべく、主を見上げ、謙遜に歩もうではないか。